青橋由高短編集7
悪魔メイドはデレデレです
青橋由高
有末つかさ
illustration
成人向け
ADULT ONLY
青橋商店
AOHASHI NOVELS

「青橋由高短編集７　悪魔メイドはデレデレです」

青橋由高（あおはしゆたか）（著）

目次

悪魔メイドはデレデレです　4
「悪魔メイドはごろごろにゃんにゃん！」　58
「トリプル押しかけ許嫁」後日談　63
「トリプル生徒会長と恋の守護霊」後日談　70
あとがき　77
電子版あとがき　80

悪魔メイドはデレデレです

夏休み。
それは学生にとって最も長く、最も青春イベント発生確率の高い大切な季節。
しかし、若くして『悪魔殺し』の称号を継いだ少年にとってはそんな甘いものではなく、ただの稼ぎ時でしかなかった。
「のう、マスター、この宿はどうじゃ？　温泉があるらしいぞ、温泉」
これまでは学校があるためなかなかこなせなかった、遠方や時間がかかりそうな依頼を一気にまとめて片付ける、というのが海藤錬太（かいとうれんた）の予定だった。
「こっちは近くに新しいショッピングモールができたそうじゃ」
二百年ものあいだ悪魔払いを生業としてきた一族の末裔として、責任を果たさなくてはならない。たとえ夏休みがすべて仕事で潰れたとしても、錬太は依頼を全てこなす決意だった。
「わらわはこの手打ちソバを食べてみたいぞ。百食限定らしいから早めに並ばないといかんな、うむ」
「……」

「ん、どうしたのだ我がマスターよ、そんな熱い、発情期のケダモノのような目でわらわを視姦して。休みになって早くも理性のたがが外れたか、肉欲の夏モードに突入か」
「あの……タマさん、僕たちが明日からどこになにをしに行くかわかってます？」
「日本全国悪魔退治の旅じゃろう？　わかっておる」
　そのために今、錬太は荷造りをしているのだ。どんな相手が敵となるかわからないため、武器は持てる限り持っていかなくてはならない。
「わかってるわりには全然準備してないじゃないですか」
「んなもの、着替えがあれば問題ないじゃろうが。昔と違ってスマホがあればカメラもビデオもいらぬし、タブレットがあれば深夜アニメも出先でしっかり見られる。完璧じゃ。マスターの荷物が多すぎるのじゃ」
「だって、どんな敵がいるかわからないんですよ、できる限りの準備はしておかないと」
「はっ！　この世にマスターを脅かせる悪魔などそうそうおるものか、このチートめが」
「タマさんクラスの上級悪魔が出てくる可能性だって、ゼロじゃないんですよ？」
「わらわと同等の悪魔がそうそうおるとは思えぬが、

たとえ奇跡的にそんな事態が起きたとしてもマスターならば楽勝じゃろうが。わらわを瞬殺しておいてよく言うわ」
かつて『紅蓮の美姫』と称され怖れられたハイクラス悪魔の珠姫は読んでいた旅行情報誌を投げ捨てると、ずりずりと四つん這いで錬太の側まで近寄ってくる。そしてそのままこてんと、錬太の膝に頭を乗せて寝転がった。
「あの黒い戦闘服といつものナイフ、あとは念のため結界用の護符を持っていけば事足りるじゃろう。旅はできる限り荷物を減らすのがコツじゃ。……にゅふン」
最後に甘い声を出したのは、錬太が珠姫の喉を撫でたためだ。この悪魔メイドが膝枕をねだってきたときは、なでなでしてくれという意思表示も兼ねている。
「ずいぶんと旅慣れてるんですね」
「わらわには各地の中級以下の悪魔どもを視察するという仕事もあるのじゃ」
「ああ、そういえばタマさん、そんな仕事もしてましたっけ」
「現在はマスターの肉奴隷メイド妻がメインじゃがな」
「だからそういう人聞きの悪いことは言わないでくだ

さいってば」
「事実だから問題ない」
「問題ありまくりです、主に僕の名誉的な意味合いで」
「わらわは気にせんぞ。……おお、問題で思い出した。明日からの旅で一つだけ大きな問題があったのじゃ」
「どんな問題です？」
「こないだ買った全録レコーダー、一週間を超えると上書きされてしまうのだ」
「……」
「ぬ、なにを呆れた顔をしておるっ。これは重要な問題じゃぞ、旅から戻ってくるのは十日後、つまり明日からの三日分は録画できんのだ！」
　自分を倒した人間の膝に頭を乗せたまま力説してくる赤髪の悪魔に、錬太は「ああ、この悪魔、もうダメだ」と心の中でつぶやく。
「うぬっ。なんじゃ、今、わらわのことを罵ったであろう！　マスターの分際で！」
　こういうときは無類の鋭さを発揮する珠姫が膝枕をさせたまま睨みつけてくる。正直、全然怖くない。むしろ可愛い。断然愛くるしい。
「え、えーと……だったら録画のレートを落としたり、チャンネルを減らせばいいのでは？」

「うつけ者、それではお気に入りの番組があったときにコレクションできぬではないか！　見逃す番組が出てくるではないか！」
この悪魔、それこそビデオテープ（もちろんベータ派だったらしい）の頃からエアチェックが趣味だったらしく、現在もちまちまとアニメやらドラマやら映画やらを録画しては、リモコン片手に編集してＢＤに焼いている。
ただし、その編集したものをあとで見るかというと、そうでもないらしい。
「編集して焼いたことで安心してしまうのだ。まあ、長い人生だ、そのうち見たくなるときもあるだろう」
確かに見た目は女子高生くらいの年齢だが、中身は三百歳の悪魔である、人間よりもたっぷり時間は残されている。
（でもこの人、絶対に見返さないだろうな、ほとんどの番組）
見直すよりも先に、かつて保存したビデオテープやＤＶＤの寿命が先に来る気がしてならない錬太である。
「まあ、いい。出先でも再生できる機能があるし、気に入った番組があったらそれだけ残してあとは消去すればなんとかなるだろう」
「え、そんな便利な機能あるんですか？」

「そのためにタブレットを持っていくのじゃ。……マスターはこういった方面は少々疎いのぉ」
「タマさんが人間のデジタル家電に詳しすぎるんです」
どちらかというと戦闘に特化したスペシャリストの錬太に対し、珠姫はなんでもこなせるオールラウンダータイプだ。メイドとしてのスキルはもちろん、機械いじりも得意としている。自動車もバイクも、多少の故障なら自分で修理できるらしい。
「それでマスターよ、明日の予定なのじゃが」
ようやく話が元に戻ってきた。
「あ、はい、まず現地に到着したら依頼人の元に行って」
「違う違う、仕事なんぞどうでもいいのじゃ。わらわが聞いてるのは、どこに観光に行くかじゃ」
「……」
こんなんで大丈夫だろうかと不安を覚えつつも、明日からの旅行に目を輝かせるメイドの喉を優しく撫でる錬太だった。

今回の悪魔払い遠征の日程はひとまず十日間としたが、仕事の進捗次第ではもっと長くなる可能性もある。

そのため飛行機や宿の予約はしていない。これも珠姫の進言によるもので、当初錬太はすべて予約をするつもりだった。
ただし最終日のみホテルを予約してあるが、これは錬太でも珠姫の意図でもない。とある人物の意向だった。
「マスターならばそれでも破綻なくすべての依頼をこなせるであろうが、旅の醍醐味はアドリブにあるのじゃ。初めての土地を歩いてるときになにか面白そうなものを発見したら、心の赴くままに足を向ければよい。それが旅の神髄じゃ」
国内線の機内で旅のベテランを自称する悪魔は語る。
錬太たちを乗せた飛行機はすでに空の上で、あと一時間もしないで目的地の九州某空港に着陸する。今日はそこからレンタカー（運転は珠姫）で依頼主のいる某県某所に到着予定だった。
「なるほど。さすがタマさん」
外見や言動から普段はまったくそうは感じないが、隣の席に座っているこの赤髪の美少女（あくまでも見た目の話である）は三百歳、つまり錬太の二十倍生きてるのだ、言葉に重みがある。
「くくく、もっと褒めるがいいぞ。この旅のあいだはわらわがマスターの面倒を見てやろう」

「それは助かります。……ところでタマさん、いくつか質問があるのですが」
「うむ、なんでも聞くがよいぞ」
「その服……なんなんですか？」
隣の席に座る珠姫は、純白のワンピースに麦わら帽子（さすがに機内では脱いでいるが）という、今までに見たことがないような格好をしていた。
「ん、なんだ、マスターはいつものメイド服のほうがよかったか？」
「いえ、それよりはマシですけども」
あの黒を基調としたエプロンドレスを纏った珠姫は掛け値なしに似合ってると思うし可愛いとも感じていたが、あの格好のまま一緒に旅をするのはかなりの覚悟が必要だ。
「安心せい、この服は今だけじゃ、あっちに着いたらちゃんといつのもメイド服に戻すぞ」
「え……」
「これは新婚の花嫁をイメージしてみたのじゃ。昔はこんな格好でハワイや熱海に新婚旅行に行くカップルが多かったのだぞ？」
「それ、いつの時代ですか……」
「わらわからしてみるとそれほど昔のことではないがな」

「まあ、そうでしょうけれど……って、新婚旅行!?」
「なにを驚くことがある？　わらわとマスターは使い魔でメイドで肉穴奴隷であり将来を誓い合った仲でもあるのじゃ、これはいわば婚前旅行、そして新婚旅行のリハーサルであろう」
　錬太がプレゼントした指輪をこれでもかと見せつけながら赤髪のメイドがふんぞり返る。ただでさえ豊かなバストがワンピースの下で大きく震え、錬太の視線が思わずそちらに向いてしまう。
「前にも言ったが、わらわにもきちんと戸籍がある。すでに婚姻届には記入済みじゃし、マスターの両親からも承諾は受けておる、なにも問題はない」
「ちょっ、いつの間に親とそんな話が!?」
　自分の両親がかつての宿敵である上級悪魔とＩＤ交換をしてたという衝撃の事実は知っていたが、まさか息子の結婚まで許可してるとはさすがに初耳だった。
「なに、ちょいとわらわの預金通帳や株券、土地の権利書などのコピーを送ってだな」
「生々しすぎるし、それだと僕、お金目的のために親に売られちゃったみたいになりませんか!?」
「冗談じゃ、冗談。半分は」
「半分っ!?　どこまでが半分!?　あと、タマさん、もしかして凄いお金持ちなの!?」

珠姫は以前、自分は金には困ってないと言っていたが、どうやって稼いだのかが気になる。
「長生きしておるとな、色々と貯まるものなのじゃ。二束三文で購入した土地に幹線道路や電車が通ることになってえらい高値で売れたり、その金で株を買った会社がたまたま気づいたら世界的企業になっておったりと、まあ、そんな感じじゃ」
「昔の成金パターン……」
「否定はせん。っつーかマスターよ、おぬしだって結構な金を稼いでおるじゃろうが。悪魔払いのギャラは安くはないからの」
悪魔払いは普通に考えれば胡散臭い仕事だが、どんな時代も常に一定の需要はある。その依頼の半分は人間以外からのものだったりするものの、基本的には途切れることはない。
一定の需要がある一方、悪魔払いの人間はそう多くない。特に腕の立つ悪魔払いは数えるほどしかいないため、それなりの技量と信頼さえあれば、結構な稼ぎになるのだ。
だから現在も先々代と先代、つまり錬太の祖父と父は妻を連れてあちこちを遊び歩いていられるわけだ。錬太が珠姫を倒して以降、一度も自宅には帰ってきていない。このまま一生遊んでいられるくらいに稼いだ

証拠である。
（祖父ちゃんたちはまだ全国温泉巡りの旅から戻って来ないし、父さんたちも世界一周旅行に行ったきりだし）
もっとも、常に命の危険があることを考えると、特別ギャラが高いとは言い切れないのだが。ハイリスクハイリターンの職種である。
「そんなわけで我がマスターよ、持参金はいくらあればいいのじゃ？」
「どんなわけですか、いったい……」
このようなバカな話をしているうちに飛行機は目的地に到着していた。

悪魔払いへの依頼とはいっても、実際に悪魔などと交戦することはそうそうない。
クライアントが同族かそれに類する者であればともかく、普通の人間からの依頼の場合、その多くは「なにか不可思議な現象が起きているからその調査と解決をお願いしたい」というケースだ。
最初は警察に通報したが相手にされず、次に興信所に依頼したものの解決せず、困った挙げ句にダメ元で……というパターンは少なくない。

悪魔払いという名称ではあるが、非科学的な現象を専門に調査・解決する特殊な探偵、というイメージのほうが実際の業務内容に近いだろうか。
「ふむふむ、もう使われなくなった廃病院で妙なことが起きるから調べて欲しい……というのがまず最初の依頼か」
「やっぱりタマさんもついてくるんですね」
「当然じゃ。新婚旅行で妻が夫と別行動するわけがなかろう」
「新婚旅行じゃないですってば。仕事です、仕事」
現地に到着してすぐに依頼人と会って話を聞き、そのまま問題の病院跡地にやって来たのがつい十分前だった。錬太はお馴染みの黒い戦闘服に、珠姫も純白のワンピースからいつもの黒いエプロンドレスへと着替え終えている。
（雰囲気あるなぁ、ここ）
時刻は午後七時過ぎ、まだ若干空は明るいが、周囲に街灯がないため、病院跡地はまさに廃墟といった佇まいで錬太と珠姫の前にあった。
「しかしあの依頼人、えらいびびっておったの」
「何度も怪しい影を見たって言ってましたからね」
潰れた病院跡地を買い取り、ここに老人ホームを建てたいと言っていたが、工事関係者がみな逃げ出すら

しい。
「悪魔というか、これは幽霊の類ではないのか？」
「タマさんは幽霊とか信じます？」
「むむぅ、今のところわらわは見たことないからのぉ。ただ、いてもおかしくはないと考えておる。悪魔や天使がおるのだ、幽霊がいたところでなにも不思議はあるまい？」
「ま、そうですね」
「で、マスターよ」
「なんです、タマさん」
「もしも敵が幽霊の類であった場合、マスターはどうやって戦うのじゃ？」
「戦いませんよ」
「は？」
「正確には、戦えません、ですかね。僕、霊感の類がないようなんで、いたとしても見えないと思うんですよ。タマさんは？」
「わらわも……どうじゃろうな、霊感と呼ばれるものがあるかと聞かれたらない、と答える気がする」
「じゃあ、逃げましょうか」
「……あっさりしておるの、マスターは」
「一応、見えたとしたら話しかけてみるつもりですが」

「いやいや、霊感がないとか言ってるような人間が幽霊と話なぞできるものか？」
「ですよねえ」
などと緊張感の欠片もない会話をしつつ、不気味な廃病院の敷地内に入る。
「……なにかいますね、ここ」
「うむ。微弱ではあるが、魔力のようなものを感じるぞ」
どうやら相手が専門外の幽霊などではなかったことに錬太は安堵する。自分が対処できるものが相手であれば大抵のことはどうにかなるという自信があるからだ。
慢心などではなく、冷静に自分の力を評価しての客観視である。
「これであの依頼人は今夜から枕を高くして寝られるというものじゃ」
「まだ全然解決してませんけどね」
「なに、相手が悪魔の類であるなら、マスターの敵ではあるまい」
「だといいんですけど」
「くくく、これで今夜はさっさと宿に戻り、美味い飯を喰らい、温泉にでも入ってマスターに朝までいぢめてもらえるの」

緊張感が欠如したまま、二人は躊躇することなく建物の中に足を踏み入れる。
外はまだ多少の明るさが残っていたものの、建物の中に入れば当然、暗闇だ。
「三……いや、四体、ですかね」
「そんなところじゃの。弱すぎて逆に数が判別できん」
かつては多くの患者たちが座っていたと思しき待合室を通り抜け、魔力の残滓を辿って建物の奥へと進む。
「あ、いた」
「いたの」
内科と外科と皮膚科の前を通り過ぎ、泌尿器科の処置室に来たところで、ターゲットと思しき悪魔を発見した。
錬太が無造作に持っていた懐中電灯を向けると、相手の姿が暗闇の中に浮かび上がる。四体の姿が確認できた。
「……どっかで見たことがあるような」
「そうか？」
ここでようやく相手も錬太と珠姫に気がついた。どうやら夕食の時間だったようで、四体で仲良くカップ麺を啜っているちょっと情けない、ある種の哀愁漂う悪魔の姿がそこにはあった。

「なっ、き、貴様ら、いつの間に！」
「我らに気配を感じさせずにアジトに侵入してくるとはただ者ではないな!?」
「察するに我らを追ってきた組織の手の者だろうが、貴様らは運が悪い」
「そう、我ら四人が勢揃いしてるこのときに現れるとはな」
　四体の悪魔がすくっと立ち上がる（ちゃんとカップ麺は床に置いていた）。
「オレは闇の翼連合四天王の一人、最速のもがっ！」
「兄者ァ!?」
「お前ら、名乗ってるときに卑怯ごはァッ！」
「あっ、貴様らはまさがふぅ！」
　悪魔たちはなにか言いかけていたようだが、それより先に錬太が仕留めてしまった。
「ん？　なんかこの連中に見覚えがあるようなないような……」
「僕もそんな気がうっすらとするようなしないような……」
　かつて錬太たちに歯牙にもかけられずに倒された闇の翼連合四天王がどのようにしてこの九州の地に降り立ち、復讐の日を夢見て力を蓄えていたかのエピソードが語られることは、当然、ない。

「どうやらこの土地に不正に入り込んでる悪魔は他にいないようですから、今回の依頼はひとまずこれでおしまい、ですね」
　気絶させられた悪魔たちは魔力を封印してから、後日、専門の業者に引き渡せばあとは強制的に魔界に送還される。
「マスターも容赦ないのお。瞬殺ではないか」
「だって僕もお腹空きましたし。早く宿に戻ってご飯食べたいですから」
「だから先に食事を済ませて、それから来ればよかったのじゃ」
「それもそうなんですが、せっかく遠出してるんですから、夜はタマさんと二人でのんびりしたかったんですよ」
　錬太のセリフに、悪魔メイドの尻尾がびん、と逆立つ。そしてそのハート型の先端を左右にぶんぶんと振りながら主である少年の腕に抱きつく。
「そ、それはあれか、つまりわらわとの初夜を楽しみにしていたということじゃな？」
「え」
「いやいや、わかっておる、わかっておるぞ。いくらマスターがチートキングの名をほしいままにする最強の悪魔払いだとしても、その中身は鬼畜でサドで絶倫

だからの、わらわのような清純可憐な美女メイドとの甘く淫らな夜への期待に我慢ならなかったのじゃろ？」
「まあ……ええ、はい、楽しみにしてなかったと言えばうそになります、もちろん」
珠姫の言うとおり、錬太もまだ高校３年生の健康な男子だ、二人きりの旅行にそういった方面での期待をしてないわけがない。
たとえ毎日、自宅で爛れた生活を送っていたとしても、である。
「くくく、初夜か……いい響きじゃの。子宮にじんじんと伝わるわ」
「いや、タマさん」
「なんじゃ？」
「初夜って、そう何度もするもんじゃないような」
黒いウェディングドレスを纏った珠姫との甘く激しい夜を思い出すだけで錬太の股間が硬度を増していく。
（あのときのタマさん、ホント、エロ可愛かったなぁ）
「いいことは何度やってもいいものじゃ、細かいことは気にするでない、マスター」
「その理屈だと、これから何度も新婚旅行してもいいことになりません？」

「なにを言ってるのじゃ、新婚旅行などという楽しいことを一度で終わらせるつもりなのか、我がマスターは」
「えぇー」
「さぁ、マスターよ、とっとと帰るぞ。初夜に向けてしっかり栄養をつけねばならん。この土地の名物料理はすでにチェック済みじゃ、案内はわらわに任せればよい」
「準備いいですね」
「なにしろ観光が今回の旅の目的じゃからな」
「仕事ですよ、仕事」
苦笑しながらも、錬太はこの愛おしい悪魔メイドと腕を組んだまま建物の出口へと向かう。
そしてこの夜は珠姫がいつの間にか予約しておいた評判の店で地元料理に舌鼓を打ち、宿に戻ってからは温泉を楽しみ、最後は当然のように二人で淫らな夜を過ごした。
自分たちが倒した悪魔のことなどはすっかり忘れたままで。